

「日本における女性の社会的進出と結婚や子育ての関係について」

要旨

21c1239 橋本紗耶佳

本稿ではキャリアか子育ての選択を余儀なく迫られる女性を対象に、改善すべき雇用環境の問題点について仮説を立てたうえで、先行研究より雇用形態を調査し、現状の問題点を明らかにすることを目的とする。また、現状における女性の労働環境を取り巻く問題点について明らかにすることは、仕事と子育ての両立を目指す女性への一助になると考える。そして社会的地位の歴史的変遷と女性の社会進出明らかにすることで、現代社会のジェンダー格差がどのような構造的背景を持つのかを解明する。また、これを踏まえて、女性の社会的地位向上を目指すための方策を提示し、日本社会の持続可能な発展に寄与する知見を得ることを目指す。具体的には以下の3つの目標を設定する：

1. 歴史的観点から、日本における女性の社会的地位の変遷を整理し、各時代の特徴を明らかにする。
2. 現代における女性の社会進出の現状を統計データや具体例を通じて分析し、残された課題を特定する。
3. 歴史的背景と現代的課題を関連づけ、ジェンダー平等を実現するための政策や文化的変革の方向性を提言する。

本研究は、女性の社会進出が日本社会全体の持続可能な発展に不可欠であるという視点から、歴史的な洞察と現代的な解決策を統合的に検討するものである。

日本社会におけるジェンダー格差の背景を歴史的視点から整理し、現代社会における政策や文化的要因がもたらす影響を分析した。まず、日本の女性の社会地位の歴史的背景を概観した。古代の律令制社会においては、女性が一定の財産権や社会的地位を持つ例が見られたものの、武家社会や江戸時代には、儒教思想の影響により、女性の地位が家庭内に限定される傾向が強まった。明治以降、西洋的な男女平等の概念が導入されたものの、実際には家制度の下で女性の社会的役割は依然として制限された。戦後、日本国憲法の制定により男女平等が法的に保障され、教育や労働市場への女性の参加が徐々に進んだ現代日本における女性の社会進出の現状を分析した結果、以下の課題が明らかになった。第一に、労働市場におけるジェンダー格差である。女性の就業率は上昇しているものの、非正規雇用に従事する割合が高く、管理職や意思決定層に占める女性の割合も低い。第二に、出産・育児とキャリアの両立が依然として困難である点である。家事や育児の負担が女性に偏る「名ばかりの両立支援」が、女性のキャリア形成を阻害する要因となっている。第三に、社会的固定観念やジェンダーバイアスが根強く残り、女性の活躍を制限していることである。また、女性の社会進出を促進するための政策や取り組みを考察した。具体的には、育児休業制度やフレックスタイム制の充実、男性の育児参加を促進する政策の強化、ジェンダー教育を通じた意識改革の必要性を指摘した。これらの施策により、女性が個人の能力を最大限に発揮できる社会基盤が構築されることが期待される。